

教育委員会だより

直方の教育

問合せ先 学校教育課

(25-2323)

中学校給食について

教育総務課

令和4年の2学期(8月下旬)から中学校給食の全員給食が始まります。

平成29年の2学期からこれまで、直方市は家庭弁当の意義・役割と学校給食に求められているニーズや役割が共存できる選択制給食を実施してきました。選択制給食は、生徒の選択肢が増える一方、偏った献立になるおそれがあり、保護者アンケートや有識者・関係者で構成する会議の結果を踏まえ、食育の観点から、小学校と同様に全員給食を実施するに至りました。

また、全員給食への変更に合わせて、これまでのお弁当箱を配送する方式から、食缶(おかずごとに缶に入ったもの)を配送する方式に変わります。これにより、料理ごとに適切な温度で提供することが可能になります。さらに、生徒

一人ひとりに合わせた食事量の調整が可能になります。

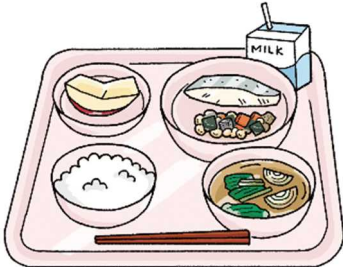
衛生面の観点から、「はし」「ランチマット」は各自持参が必要になりますが、これまで以上においしい給食の提供ができるよう尽力いたします。

子どもたちの心身の成長や人格の形成に多大な影響がある義務教育における食育は、教育的意義が高いものであり、重要なことです。

望ましい栄養や食事のとり方を理解し、自ら管理していく能力を身に付けることは、将来の自分自身の生きる力を育みます。

将来、子どもたちが学生時代を振り返ったときに、学校給食が楽しい思い出の一つとして残るよう努めてまいります。

直方市中学校給食の詳細を掲載
(直方市ホームページ)



新教育部長挨拶

熊井 康之

本年度、教育部長に就任しました熊井康之です。教育部長職の責任を重く受け止め、誠心誠意職務の遂行に努めて参ります。

日本の社会と教育が一大転換を遂げる中、直方市教育委員会は、「未来を拓き、心豊かたくましく生きる子ども育成」との教育目標に向けて、取り組みを進めて行きます。

小中学校では、今年度も、確かな学力の育成を最重要課題と位置づけ、それを支える豊かな人間性の育成と体力の向上を目指した教育を推進します。

乳幼児期の教育・保育は、生涯にわたる学びの基礎を培い、社会で生きて働く幅広い能力を身に付けさせるために重要です。

幼稚園や保育所と協力し、早い段階からの教育・保育の充実に努めてまいります。

また、活気ある直方市の教育推進とともに、まちを創造的に発展させていくことのできる人づくりのために、誰もが生涯にわたって学び続けることができる環境づくりにも取り組みたいと考えます。

子どもたちが、直方市に深い愛情と誇りを持ち、将来に希望を持ちながら学び続けるためには、地域や社会とのつながりと世代間を超えた交流や関わりが何よりも大切です。

ぜひ、皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

美術館の取り組み

直方谷尾美術館館長 花田義朗

三十年以上直方の中学校で教壇に立っていましたが一昨年より以前から働いてみたいところ、美術館で働く機会を頂きました。

美術館の課題も多くありますが、毎日やりがいを持って過ごしています。そういう中で多くの美術に関わる人たちと知りあいになることができます。それは画家であったり彫刻家や陶芸家もいます。そのことは、自分にとって直方の文化を知る上で大切なもので、知識の広がり、また、この仕事の基盤になっていきます。作品も同じで、今は収集の手段は、寄贈がほとんどですが、それは絵画・彫刻・陶器だったり、この頃は工芸作品も話が来ます。思いもかけないような美術品に出会うことも少なくありません。先日、人伝いに「直方の福地座の文楽人形」の話聞き、直方にもそういう文化があったのだと知りました。幼少期にテレビで南総里見八犬伝の人形劇を

見て辻村寿三郎が作った文楽人形にならって子どもながらに頭(かしら)を何体も作ったことがあります。

まさにそれは一例で、それ以外にも文化意識・価値を持った人やものが直方にはたくさん存在します。しかしながらそれはもっと広く周知されるべきであり、おこがましいのですが、それを掘り起こし、支えていくことが任務だと考えています。

のおがた子どもアート大賞展

昨年度「第一回のおがた子どもアート大賞展」を開催しました。これも、美術に興味を持ち、未来に生きていく子どもたちを育てるという美術館の大切な役目です。今回は作品募集にあたって小・中・高校生と幅広く募集しました。実際、具象、半立体、版画、平面絵画などの

作品が搬入され、入選・入賞が決まりました。展覧会は、様々なジャンルの作品が展示



され才能を持った多くの子どもたちに出会え、大成功に終わることができました。

千三十一点の応募があり、二百六十四点の作品が入選したのですが、入選したから、入選しなかったからではなく、美術は様々な見方があります。それぞれの見方によって変化します。現代は右か左かで解決しようとする傾向にありますが、それだけでは解決できないところに美術の価値があります。より広い視野の中で子どもたちの才能を伸ばす援助ができればと思います。



土門拳記念館コレクション展

「土門拳 肉体を超えたレンズ」

写真界の中で自分が一押しするとしたら土門拳。そのきっかけになった作品が、東大寺戒壇堂の「広目天」を写した作品で、それはまさに

憤怒してこちらをにらみつけ、微動だにできない感覚に陥ります。土門拳はリアリズムを追求した写真家で、彫刻家である高村光太郎が「風貌」の中で「土門拳は不気味である。彼のレンズは人や物の底まであばく」と言っています。「仏像」シリーズでは、いかにもそこに人がいる



【昭和のこどもたち】

ような存在感を描き出しています。また、「昭和のこどもたち」のあどけない表情は、心を和ませます。

今回「一般社団法人地域創造」の援助を頂きまして山形県酒田市の土門拳記念館から約百二十点をお借りして、「古寺巡礼」・「筑豊の子どもたち」・「昭和のこどもたち」・「日本人と戦争」・「風貌」等のシリーズを展示します。

土門拳が、どんなことをカメラのレンズを通して伝えたかったか探ってほしいと思います。